

子ども・若者の 新しい居場所のカタチ ～体験・成長の居場所づくりとは～

2023年度調査報告書



子ども・若者の新しい居場所のカタチ

～体験・成長の居場所づくりとは～



目次

はじめに 2

パネルディスカッション取材記事 3-8

「青少年活動と居場所づくり」

〈ゲスト〉

- ・辻 幸志さん（NPO法人こうべユースネット 理事長）
- ・竹内 茂雄さん（NPO法人高砂キッズ・スペース 事務局長）
- ・岩崎 由美子さん（あこう子ども食堂 代表）

〈コーディネーター〉

- ・速水 順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）

インタビュー記事 9-16

アクティブスクールという居場所とは

高橋 惇さん（一般社団法人イドミィ 代表理事）

公共の施設が若者の居場所に…

片岡 一樹さん（尼崎市立ユース交流センター センター長）

プレイパークという居場所とは

小南 広之さん（淡路島冒険の森 主宰）

提言 17

活動が「青少年の居場所」となるために～10の確認～

ひょうご青少年憲章 18

はじめに

日本は2019年に国連子どもの権利委員会から、多岐にわたる勧告を受けました。その中には、差別の禁止、子どもの意見の尊重、体罰、家庭環境を奪われた子どもについてなど、緊急に解決すべき課題も挙げられています。また、2022年の文部科学省による児童生徒の諸課題の調査では、いじめや不登校、暴力行為、自殺など、どの課題の件数も増加傾向にあり、子どもたちをとりまく社会問題は留まることなく深刻化し続けています。

そんな中、2023年こども家庭庁が発足し、子どもや若者の居場所づくりが叫ばれるようになりました。全ての子どもが、安全安心に、多様な体験活動を通じ自己肯定感や自己有用感を高め、身体的・精神的・社会的に将来にわたって幸せな状態（ウェルビーイング）が得られるのが「居場所」です。そんな居場所を、子どもたちが見つけられないという状況が起こっているのです。ここでいう「居場所」とは、物理的な「場」だけでなく、遊びや体験活動、オンライン空間といった多様な形態をとり得るものと捉えられています。

私たち兵庫県青少年団体連絡協議会は、昭和42（1967）年に発足し、兵庫の青少年が心も身体も健康に育つことを目的に活動を続けてきました。そこに加盟するそれぞれの青少年団体は今日まで、子どもたちのためにさまざまな活動を行ってきました。しかし、その活動が、子どもたちの「居場所」とはなり得ていなかったのかもしれません。

今回の調査研究事業では、子どもや若者の居場所づくりを様々な形で実践されている方々のお話をお聞きしました。その場が、なぜ子どもたちの居場所となり得ているのか、そこに集まる子どもたちが何を必要としているのか。子どもたちにどのような関わり方が必要なのかなど、ここでは私たちが思いもしなかったような視点や取り組みが語られました。

青少年活動は青少年が主役の活動です。主役とはお客様ではなく、主体者であるはずで、子どもたちの話を聴き、子どもたちの視点に立ち、子どもたちと共につくる、そんな原点に立ちかえることが、私たちの活動の居場所づくりにつながるのかもしれません。



兵庫県青少年団体連絡協議会
調査研究委員会 委員長

山崎 清治

「青少年活動と居場所づくり」

取材・編集

KooBee



実践者らによるパネルディスカッションを2024年1月15日、神戸市中央区の兵庫県民会館で実施し、県内で青少年教育に携わる約60名の方が出席しました。パネリストは、神戸で青少年の居場所づくりを行うこうべユースネットの辻幸志理事長、高砂市と播磨町で学童を運営する高砂キッズ・スペースの竹内茂雄事務局長、こども食堂をサポートする兵庫こども食堂ネットワークの岩崎由美子副代表の3人に、進行役は兵庫県青少年団体連絡協議会の速水順一郎顧問に務めていただきました。また、グラフィックレコーディンググループのしょむすびさんに座談会の様子を絵や図形などを用いてリアルタイムでまとめていただきました。



ゲスト



辻 幸志さん

NPO法人こうべユースネット 理事長



竹内 茂雄さん

NPO法人高砂キッズ・スペース 事務局長



岩崎 由美子さん

赤穂市地域活動連絡協議会代表、
兵庫こども食堂ネットワーク副代表

コーディネーター



速水 順一郎

兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問

青少年活動と居場所づくり

活動をはじめたきっかけ



活動内容や活動を始めたきっかけについて教えてください。



私は主に中高生層の居場所づくり事業を、神戸市青少年会館を拠点に活動しています。昔、とある大学生のキャンプリーダーに憧れたことがきっかけで、青少年会館の会館リーダーなどの活動を始めました。



学童保育のアルバイトをきっかけにNPO法人の立ち上げに関わりました。今は高砂市と播磨町で学童保育所を運営し、合計1200人の子どもを毎日預かっています。子どもを楽ませるために、お化け屋敷や巨大迷路などのイベントも企画しています。また最近では高砂市内でこども食堂の立ち上げの後押しをしています。



私は2017年に自分の力で何かをやりたいと思い古民家を購入しました。その時にたまたま兵庫県の第1回目のこども食堂の立ち上げ事業のことを知って、やってみたら楽しいかもと思い、はじめました。大学生や地域の方のサポートもあり、今では多い時150人ぐらいの子どもが事業に集まるようになりました。



【 志は子どもたちのために 】



これまでの活動をふり返って思うことを教えてください。



はじめた当時は、何人か子どもが集まって、ご飯を食べさせてあげられたらいいなという感じでしたが、思っていた以上に地域の方に協力していただくことができました。地域の方の子どもたちへの想いがあったからこそ7年も活動を続けてこられたのだと思いますね。



2008年から「こどものまち」という、会場を1つの町に見立てて、小学4年生から6年生までの子どもたちに自分の力でお店を作ってもらうイベントを開催しています。はじめは一般の参加者として来ていた子が次は子ども店長として参加してくれて、大学生になった今でもまだ手伝いに来てくれます。そのような様子を見ると、物理的な場所だ

けじゃなくて、お店を作るための会議や準備中の何気ないやりとりも、その子にとっては心の置き場所だったんだなと思います。そういうことを大事にしながら日々活動しています。



私は昔から青少年が自分の価値に気づいてもらえるように活動しています。コロナ禍を経て、「育成」から「支援」にスイッチしてきているのかなと思います。昔のように自分を主張するのではなく、目立つのを嫌がる中高生がよく居場所に来るようになりました。実際に職員が話を聞いてみると、家で困っていたり、学校に行けていなかったりしています。育成と支援の重なり合うところの領域を大切に事業展開をしていきたいです。

【 子どもたちからのSOSを見逃さないために 】



支援が必要な子どもが増えてきているのは確かだと思います。何かその家庭に対する支援策など、解決の糸口になると思うことはありますか。



家庭環境はそれぞれ違うので、まず理解することが大事です。支援を必要とする子どもの状況が複雑化している今こそ、青少年団体の連絡体の力を大事にして、家庭との関係性を築いていく必要があると思います。



学童保育の観点で言うと、私たちが思わず眉をひそめてしまうような話を子どもから聞いたりします。でもその家庭環境に踏み込んでいくとはなかなか難しいですね。



支援が必要な家庭を支えるには、様々な方向からのアプローチが必要です。でも個人情報や行政の壁があるのが現状です。情報は提供できるものの、私はケース会議には参加できません。そのあたりの仕組みがもう少し上手いけばいいなと思います。

支援を必要とする子に対して今、私たちが出来ることはとても限られていると感じたと同時に、何から始めればいいのか分からないというもどかしさをパネリストの方々のお話から感じました。

編集者コメント

【 これからも前に進むために 】



これからの取り組みや課題についてお願いします。



最近では支援を必要とする状況が複雑化していて、対応が難しくなっています。子どもに関わる人の専門スキルが求められていると思います。団体としてもっと勉強をしてスキルを高めていきたいと思っています。



こども食堂はかなり規模が大きくなってきているので、資金繰りが大きな課題ですね。来年はもう無理かなと思うときも正直あります。今のこども食堂は、子どもたちで作上げてきたものなので、特にイベントはやりません。でも資金があればクリスマス会とかやりたいですね。



私はもう20年以上、子ども会活動や青少年活動を中高生のサードプレイスにするために活動してきて、これからもぶれることなくやっていきたいと思っています。ただ、行政と共に行う居場所作り施設にはやっぱり限界があるんです。夜8時になったら施設は閉めないといけません。でも本当に居場所を求めている中高生は、夜に来たいと思っているかもしれないんです。そこから、サードプレイスを民間主体でやっていきたいと思うようになりました。

そして、ようやく今年の4月から私の生まれ育った兵庫区でスタートできるようになりました。私が居場所づくりで一番大事にしているのが、そこにいる人との関係性です。人との関係性を大事にこれからもやっていきたいと思っています。



子どもたちのサードプレイスになるためには人と人との関係性など環境を作っていくことが大切であることを学び、資金面など大変な中でも子どもたちが何を求めているのか汲み取って対応していくことが大切だと思いました。

編集者コメント



青少年活動が居場所となるために



青少年活動は子どもたちや若者の居場所になることができますか。



私は青少年活動団体のプログラムが居場所になると思います。プログラムには指導者という形で関わっている皆さんがいて、そこに子どもたちが参画する。ときには活動を続けてきた大学生がリーダーとしてサポートで入る。これだけの関係性があれば居場所になり得ると思います。実際に僕もキャンプで大学生のキャンプリーダーにいろいろ教えてもらったことが原点で今ここに座っています。



居場所になるためにはいくつかの条件があると思います。例えばクリスマス会を開いてケーキを用意したり手品の人を呼んだりする。これで終わりっていうのは駄目ですね。



それは与えられただけになるので、居場所ではないですね。そこで自分が誰かの役に立ったとか、今日はこういうことをできたよっていうことを、家に帰ってお母さんお父さんに伝えることを重ねていくことで、そこが居場所になると思います。



「こどものまち」の話の中でもありましたが、場所だけじゃなく、スタッフとただしゃべっているだけの時間が、楽しくて仕方がないからまた来たいと思い、毎年来てくれるようになる。そこでの関係性が継続していくからこそ、そこは居場所になると僕は思っています。「人」と「プログラム」と「時間」が居場所となるには必要なのかな。もしかしたら1回だけでもすごく楽しくて、それがその子の心にずっと残って、パワーになっていくことがあるかもしれません。そしてそれが2年3年と続いて、その子にとっての心の置き場所になっていくと思います。



子どもだけではなく大人にとっても、人と人の繋がりが居場所となるのに重要な要素だと思います。たとえ1回のイベントでも、そのときに誰かと交流するというのが、ひとつのきっかけになります。そういった部分では青少年活動は居場所になり得ると思います。

青少年活動は子どもたちにとって誰かと交流ができる場所であり、また来たいという気持ちがすでに居場所になっているということ。私たちがどう関わるかが重要なのだと感じました。

編集者コメント

【 多様性を尊重して更なる発展を 】



青少年活動と居場所づくりということでたくさんのアドバイスをいただきました。皆さん方のお話を聞いていて、大変だしお金も足りない中でも楽しんで活動を続けられているのがすごく伝わってきました。楽しんで活動を展開しているからこそ、人が共感して集まってきて、支援の手を差し伸べてくれるのですね。子どもたちについて色々な機関と情報を共有する必要性についての話もしていただき



ました。個々で持っている情報を共有することによって、より幅を持ってその子どもや周辺を見つめ理解することができるのではないかなと思います。青少年団体の活動が子どもの居場所になるためには、そこで子どもの人間性が保たれて、生かされて、育てていける環境ではないといけないと思います。大人である私たちがプログラムを考えたほうが早いですが、手を出さずに子どもたちの様子を見ながら、一緒に考える場を持つということが非常に大事だと思いました。

最後に、子ども若者はひとりひとり違います。私達はグループで子どもたちと対峙することが多いですが、グループを構成しているメンバーがそれぞれ違うということを理解して、活動を進めていかないといけないと思います。そのことが子どもたちの居場所に繋がり、団体活動の発展にも繋がってくるのではないかと思いました。

comment

編集後記



この記事は神戸大学フリーペーパーサークルのKooBeeが作成しました。普段は神大生の素敵なキャンパスライフをお手伝いするために、KooBee 冊子の発行やWebサイト WeeBee の運営、SNS などを通して、様々な情報を発信しています。

今回のパネルディスカッションで私は大学生リーダーの役割の大切さを学ぶことができました。私はキャンプリーダーとして何度か子どもたちと関わったことがあります。自分が思っていた以上に、キャンプリーダーは子どもにとって大きい存在なのだと思います。私はこれまで子どもと楽しく遊べればよいとだけ思っていたが、それだけではなく、子どもには、自分の力で何かができるという経験が大事だということがわかりました。その経験の積み重ねで、子どもに青少年活動が居場所だと感じてもらえ、さらに、子ども自身の自立にもつながる。子どもが自分の力でできるように見守っ

て、自立を促していきたいと思いました。

また子どもたちに比較的年齢の近い大学生だからこそ、ナナメの関係を構築して、この大人には悩みを打ち明けてもいいと思ってもらえるようになりたいと思いました。話の中にもありましたが、支援を必要とする子どもたちの数は増え、その要因は複雑化しています。子どもの SOS のサインを見逃さないようにしていきたいです。本当にたくさんのことを、今回のパネルディスカッションから学ぶことができました。憧れの大人になれるよう失敗を恐れずに頑張っていこうと思います。



KooBee うつぼ&TOMONO

青少年活動と居場所づくり

グラフィックレコーディング



記録：しよむすびさん





interview

一般社団法人イドミイ 代表理事
高橋 惇さん



interviewer
萩本 義郎



兵庫県青少年団体連絡協議会 監事
一般社団法人いえしま自然体験協会 副会長

“アクティブスクールという居場所とは”

活動のきっかけ

2012年、高橋さんは教員と芸人の二択で進路を迷った末、お笑い芸人の道へ進みました。その中で、「〇〇大学出身のくせにそんなこともできないのか」と言われ、「学校で必要とする力」と「社会で必要とされる力」のズレを感じたそうです。そんな中、とある小学校を訪問する機会があり、教育への想いが再燃したそうです。自分のように社会でつまづかないために「理想の教育」をカタチにできないだろうか?と考え、現在の活動を始められました。子どもたちと教育現場の現状を知るために「旅する先生プロジェクト」を企画し、自転車で日本を周りながら全国の学校で講演活動をされました。このプロジェクトを通じて得られたことが3つあるそうです。



- ① 経験値 (やって初めてわかることがある)
- ② 知恵 (失敗の先に成功がある。次はこうしようという工夫)
- ③ 人との出会い (つながり。自分の周りの人を大切に)

これらが高橋さんの今の活動の原動力になっていると感じました。

旅を経て居場所作りへ

470日の旅を終えた後、学校で働くよりも、子どもたちが実体験を通じて学べる学び場・居場所を自分で作りたいと感じ、2017年に「イドミイ!」を開校されました。保護者の方からの声で不登校の子どもたちの受け入れも行いました。2018年2月には非営利事業に特化するために「一般社団法人イドミイ」を設立し、現在は約130名

の小中高生に豊かな学びを提供されています。高橋さんが2030年までに目指しているのは、体験格差からおきる教育格差をなくすこと。そのためには子どもたちが主体性をもった実体験をすることが重要だとお話してくださいました。



実体験こそ最大の学び

SNS など情報があふれる時代になり、私たちは様々な情報を見ることが出来ますが、見ることと実体験は全く違います。実体験で得られることは、経験値・知恵・自己肯定感・感性・社会関係資本など数知れません。高橋さんは「やってみたいことをやってみるチャンス」が子どもたちに必要だと話されます。

「子どもたちが多彩な実体験ができる仕組みをつくろう!」と、イドミィはフリースクール、学習塾、アウトドア体験、講演活動と活動を幅広く展開するようになりました。

「イドミィ」とは、「挑み」と「I will do my best! の略」をミックスさせた造語だそうです。高橋さんは、多様な子どもたちに多様な体験を提供することで、挑戦する子が少しずつ増えてきたと感じているのだそうです。



子どもの成長を実感 = 出会いや言葉が人生の種になる =

以前、小学 5 年生のひとりの子が、塾のクラスに来ていました。ある日、授業を受けることもままならないほど疲れている様子であった彼に、高橋さんはさまざまな職業が紹介されている本と一緒に見ようと提案しました。その中で、救急救命士のページに目が留まっていることに高橋さんは気付いたのだそうです。

そこで、高橋さんは知人の救急救命士に塾に来てもらい、彼とお話をしてもらったのだそうです。やがて彼は塾を卒業したのですが、高校 3 年生になったとき、急にイドミィを訪ねてきたそうです。彼は「救急救命士になるために勉強している」とのことでした。その後、勉強

の甲斐あって、救急救命士の学校に合格しました。「小学 5 年生のときの救急救命士の方との出会いや言葉が、夢の種になったんでしょう。素晴らしい瞬間に立ち会えました」と話してくださいました。

子どもたちのさまざまな変化は、なかなか数値化は出来ませんが、子どもたちと接していると、いろんな成長を感じるのだそうです。教室には「かつつきたい」と書いた 6 つの目標が掲げてありました。将来子どもたちが大人になった時に思い出してもらいたいと話してくださいました。

- か …… 考える (主体性をもって選択する)
- つ …… 作り出す (お金を使わず頭を使いアイデアを生む)
- つ …… 伝える (自分の意見を文字や声で届ける)
- き …… 協力する (仲間を認め、長所を生かし合う)
- た …… 楽しむ (ポジティブに捉える)
- い …… 生きる (1 番大切 今を生きよう)



高橋さんのこれから

子どもたちの居場所として、大切なことは選択肢が多くあること。その場所に選択肢が増えれば増えるほど、子どもたちの居場所になりえるのではないかと話していただきました。居場所では「斜めの関係を大切にしたい」横の関係（友達）と縦の関係（親や先生）がいる中で、自分は横でも縦でもない、親戚のおじさんや近所の兄ちゃんみたいな斜めの関係でありたいと。その関係で子どもたちに寄り添いたいとお話していただきました。これからは子どもたち、保護者、そして自分自身にとってもっと満足度の高いものを提供していきたい。全国展開など活動

を広げていくのではなく、町の中で、町の人たちのために営む中華食堂のような存在でありたいと話していただきました。

今は、子どもたちにとって習い事が「居場所」の機能を果たしていくことが現実的なのではないか。青少年団体も子どもたちの居場所となるために、SNSや映像などさまざまな方法で情報を発信し、多くの方に知っていただく工夫が必要ではないかと青少年団体に向けてアドバイスをしていただきました。



comment

インタビューを終えて

以前、お子さんの不登校で悩んでおられる保護者の方々から、子どもたちが人とふれあう場を地域の中で作りたいと自主的に活動を始めるも、なかなかうまく運営することができずと相談を受けたことがあります。苦しんだり悩んだりしているのは子どもたちだけでなく、その保護者の方々も同様です。地域の中に子どもたちの居場所があるということは、子どもたちにはもちろんのこと、保護者の方々にも大きな安心感を提供することにつながっているはず。高橋さんのお話を聞き、地域の中で実践されている姿に深く敬意を払いたかったと思います。





interview

尼崎市立ユース交流センター センター長

片岡 一樹さん

interviewer

太田 はるよ



兵庫県青少年団体連絡協議会 運営委員
一般社団法人兵庫県子ども会連合会
筆頭副理事長



“ 公共の施設が若者の居場所に… ”

「尼崎市立ユース交流センター」に行ってきました!

阪急園田駅から15分ほど歩くと広大な敷地が目の前に広がりました。その敷地内にはいくつもの建物があり、その中の不思議な形をした「あまぼーと」で、片岡一樹センター長が私たちをあたたく迎えてくださいました。想像していたよりもグッと若い!そして辺りを見渡すと若者がくつろいでいる姿もチラホラ。ここは大学だった場所を尼崎市が譲り受け、市から指定管理を受けたNPOが、子どもや若者たちの「居場所」の運営を行なっています。利用者は小学生から中高生や大学生まで幅広く、多様な子どもや若者たちの交流の場となっているようです。私たちも施設内を案内してもらいながら、公共の施設によくある「作られた感」を感じさせない、なんとも言えない心地よさを感じました。若者たちの声を反映させ、施設内のレイアウトをこの2年の間に30回以上も変えているのだそうです。そしてそのレイアウト変更は現在も進行形だそう。「ああ、なるほど…だから自分たちの居場所になっていくんだ」と納得しました。



「やりたいをやる」ミッションって？

尼崎市立ユース交流センターが目指しているのは、やりたいことを誰しもが思いきりできる環境です。施設の中にはオープンラウンジ、音楽スタジオ、ホール、会議室、自習室等があります。ここでは様々な過ごし方ができ、一人ひとりが自分自身を大切にできる場所となっています。小学生が自由に広場でドッジボールができたり、若者が一人でフラットと来てスケートボードができたりするのは。もちろん、そんな環境づくりは、悩み事相談や若者たちの「小さなやりたい」の声を、しっかり受け止めながらだからこそ出来ていることだと感じました。利用するだけでなく、運営にも関わりたいという中高生が、ユース実行委員会として主体的に活動しています。自分たちでこの居場所での課題やその解決策を考えているのです。自分たちで「やりたいことプロジェクト」という活動も進められています。そういった場に参加するも、参加しないも自由。そこには常に主体性が認められています。このような中高生の交流で生まれるのが、学校教育にはない年齢を超えた「フラットな関係」や「子どもや若者同士の情報交換」だそうです。さまざまな共感体験がお互いの情報交換につながっています。例えば中学生が「〇〇高校ってどんなところ？」と気軽に高校生に聞くこと



で、リアルな情報や感想を得ることが出来ているのだそうです。

大人スタッフの役割は、あくまでもその橋渡しだそうです。ただし、普段から彼らと一緒にいて「繋がり」や「関係性」を築いておくことを大切にされています。何かあったときに本音の部分の話しやすくなっているという適度な距離感を感じました。

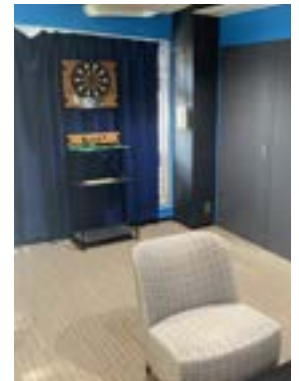


大人の役割ってなんだろう？

ここに来る子たちの中には、自分の居場所を求め、社会の中で何らかの「生きづらさ」を感じている子が多くいるそうです。

「社会や家庭の中で自由な空間が減少し、禁止事項のルールが多く、そこでそのルールを破ると怒られるという負の連鎖にぶつかり、子どもたちはフラストレーションを感じています。彼らは『ここならOK』『ここなら大丈夫』という居場所を探しているのでしょう。禁止としていることをOKにしたから居場所となるわけでは決してありませんが、もっとこういう施設や大人が増えたほうがいい」と片岡さんが話してくださいました。

こういった公共の居場所には、様々な社会的なメリットが求められます。学校や行政などを含めた社会が一体となって、子どもや若者たちの「居場所」が一つでも多くできるためには、このような施設の実践成果の認知度を上げることも重要なことかもしれません。片岡さんは「今後もこの活動を頑張ってアピールしていきたい」と熱く語ってくださいました。



貼り紙1つにも工夫が。禁止や否定の言葉はありません。

comment

インタビューを終えて

地域のつながりが希薄になり、家と学校以外の居場所がなくなり、そこでうまくいかなくなってしまうと行き場がなくなり、生きづらさにつながってしまう子どもたちが増えているのだと思います。今回の取材を通して実感したことは、これからの青少年団体はただ単に大人の都合や考えだけで『場所』や『人』を用意するのではなく、子どもや若者の声をしっかり聴き、その声を反映することによって、子どもたちと共に安心して過ごせる『環境』（居場所）を整えることが、重要であり必要不可欠だということです。それは、いかに大人や

団体が変わるか？にかかっているのかもしれませんが。今回の取材では、大変貴重なお話をいただき、様々な気づきがありました。職務でお忙しい中、対応して下さった片岡さんには心より感謝いたします。ありがとうございました。



interview

淡路島冒険の森 主宰

小南 広之さん



interviewer

速水 順一郎



兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問



“ プレイパークという居場所とは ”

活動のきっかけ～冒険の森づくりはここから始まった～

かつて教員だった小南さんは、子どもを取り巻く環境の変化に気づき、子どもの日常の窮屈さを感じていました。のびのびとした子どもの姿を見ることが少なくなったのは、親の過保護や過干渉が大きな要因ではないかと思われたそうです。

小南さんの子ども時代は、子どもの縦社会（異年齢集団）があり、自由な集いの場が日常的にありました。その中で様々な体験を通じて子どもは学び、お互いに認め合っていたそうです。

このような経験から子どもが自然の中で自由に遊び、過ごせる空間の必要性を感じ、冒険の森づくりが始まりました。

そんな思いを具体的に進めようと、多くの理解者、支援者が小南さんの後押しをしてくれたそうです。



冒険の森で大切にしていること

「子どもの持つ力を発揮し、子どもの人権を尊重し、他人に迷惑をかけること」をモットーに、子どもの自由な遊び場を作ること。また、自己責任で遊び、プログラムで行動を縛らないこと。そして、子どもの発想や行動に備える準備はしっかりしておくことだそうです。

この森には、木の実や遊びの材料になるようなものがたくさん置かれています。子どもたちが、自由に使ってもいいように準備されているのもこの思いからです。



運営について

始めたころは支援金もあり、若い指導者も手伝いに来てくれました。ですが、若い指導者が良かれと思って子どもに過干渉ぎみに接する場面があり、しばしば、「冒険の森の理念を認識してもらいたい」と思うこともあったと言います。指導者が育つには主催者側の我慢も必要だと実感されたそうです。そのような葛藤もありなが

ら、設立当初は若い指導者に活動を支えてもらっていましたが、近年は支援金も減り、シニア層が中心で行っているそうです。しかし、設立から20年も経つと、ここで育った子ども達が大人になり、活動に参加してくれることもあるそうで、今はその人たちが貴重な戦力となっているそうです

今思うことと冒険の森のこれから

開設時からここで過ごした人たちが、ここの理念をもとにフリースクールや子ども食堂、子どもの居場所事業などに取り組んでおり、小南さんの活動が少しずつ地道な形で広がっていることを実感しているそうです。

「子どもには素晴らしい力があり、子どもから学ぶことが多い。子どもの権利を大人がしっかりと認識できるようにこれからも運営に取り組みたいです。」と話してくれた小南さん。

また、ここで体験した子どもが「こころのふるさと」として体験の場を広げてほしいそうです。



comment

インタビューを終えて

小南さんの思いがこもった冒険の森、そしてその思いに共感した人たちが集まり、冒険の森を創ってきました。ここで育った子どもが親になり、郷に帰ってくる様な気持ちで家族と一緒に訪ねてきます。また、その中には指導者として活動している人もいます。人のサイクル活動が行われているのです。また、この地から離れた人たちにも冒険の森の理念に基づいた活動が広がっています。

私はこのような場所が小学校区にひとつあればよいと思いました。指導者が自然の中で育つ体験の大切さを認識すること、そして、生きていくうえで大切なことを子どもたち自身が学び、身に付けていくのを見守ること。そのような居場所が必要だと感じました。

指導者の視点のみで活動を展開するのではなく、子どもの目線（視点）に立って活動を進めることで活動を日常化し、かつ、体験の少ない保護者も子どもと一緒に体験ができる機会を提供することも大切だと感じました。



ここは「自分の責任で自由に遊ぶ」場所。「できることを増やして自信をつけてほしい」そんな思いでつくられています。

活動が「青少年の居場所」となるために

10 の確認

さまざまな実践者の方々からお話をお聴きしてわかった共通点。それは、活動の種類やプログラム内容ではなく、運営の仕方や青少年への関わり方が重要だということでした。

青少年活動団体は今まで、青少年の健全育成を目的として様々な活動を行ってきました。さらなる活動の充実を目指すあまり、活動を行うことそのものが目的となり、そこに集まる青少年たち自身の居場所となることを後回しにしていたのかもしれませんが。

私たちの活動そのものが青少年たちの居場所となるために、今回の調査研究活動を通じて、それぞれの活動を見直す確認項目を作成しました。

今一度、活動に集う青少年のために私たちの活動を見直してみませんか？

- 1 「こどもの権利」をはじめとした、
ひとりの人間として尊重された青少年の権利がそこでは守られていますか？
- 2 青少年一人ひとりが、個性や家庭環境、
出身地や嗜好などさまざまなマイノリティにより差別されることなく、
自分らしくいられる場所ですか？
- 3 青少年にプログラムやスペースなどを一方的に提供するだけでなく、
青少年の声を聴き、青少年自身にも役割があり、
共につくる居場所を目指していますか？
- 4 指導者から常にプログラムやサービスを提供したり、
指導者が人とのつながりのハブになったりするのはなく、
青少年同士が主体的に行動し、
異年齢を含めた様々な人とつながる場を目的としていますか？
- 5 青少年の主体的な行動や規範、青少年同士の対話を尊重し、
大人からのルールや禁止事項を最低限にしていますか？
- 6 指導者から青少年への関わり方は体罰や押し付けがないことはもちろん、
「きく」「見守る」を基本にしていますか？
- 7 青少年の SOS をキャッチし、家族への関わりも含め、
包括的に対応する体制がつくられていますか？
- 8 指導者同士の研修や育成を継続的に取り組んでいますか？
- 9 社会の流れや、そこに集まる青少年の様子から、
活動のやり方を常に見直し新しい取組みを検討していますか？
- 10 指導者や運営スタッフ自身も活動や運営を楽しんでいますか？

ひょうご青少年憲章

いま、私たちは暮らしや社会のあり方が大きく移り変わる転換の時代にあります、先の阪神・淡路大震災は、人と社会に何が必要なのかを改めて教えてくれました。

私たちは、これまでの自分の生き方を省みて人間生活の基本に立ち返り、自らを尊ぶと同時に、家庭や地域や国、そしてかけがえのない地球に生きる人間として、ひょうごの明日を担う青少年とともに、自信と夢と勇気をもって21世紀を築いていくことを誓い、この憲章を定めます。

- 1 自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう
- 2 ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう
- 3 人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう
- 4 多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう
- 5 自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう
- 6 先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

「ひょうご青少年憲章」の考え方

自尊・自律

自分を大切にし、自らを律し、行いに責任をもって生きていこう

自ら考え、自ら判断し、自らを律していく自律性は、人間の本質に属します。そこで人は、おのおの自らを尊重し自信と誇りをもつとともに、権利や自由だけではなく、それらと不可分に結ぶ義務や責任も果たしていくことが欠かせません。

協力・公正

ふれあいを深め、正義感をもち、社会を担う一人として生きていこう

人間は社会的な存在であり、人々の協力・協働によって暮らしを営んでいます。人と人とのふれあいを深め、社会の基本的なルールを守り、社会の構成員としての役割を担っていくことが望まれます。

思いやり

人の痛みや喜びを感じあえる心をもって生きていこう

人間関係には、利害にもとづく合理的な関係と、それを越えた心のかよいあいがあり、温かい人間関係を生み出すのは後者です。そこで、人間的なぬくもりのある社会関係が形成されていくには、どうしても共感や思いやり、あるいは友愛の心が育まれていくのでなければなりません。そうでなければ、人間関係は合理性のみを追求するものとなり、人間的なぬくもりは消えていくことになるでしょう。

寛容・共生

多様な人々の存在を受け入れ、ともに支えあって生きていこう

社会は、自分と異なる立場にあつたり、様々な価値観をもった人々で成り立っています。社会の急速な変化のなかで、価値観やライフスタイルの多様化が進み、人・モノ・情報などの地球規模での交流も加速しています。このような状況のなかで、調和ある共生社会を構築するためには、人々が互いの違いを認めあい、尊重しあうことが不可欠です。

畏敬

自然を愛し、生命を尊び、みえない世界にも襟を正して生きていこう

古来、私たちの先祖は、美しくも厳しい自然を畏敬の念をもって見つめ、その営みに自らの生活をあわせながらひたむきに生きてきました。しかし急速な科学技術の発達や経済の発展の中で人知と人力に対する過信が生じ、自分と自分を取り巻く世界に対する敬虔さといったものが失われ、人・社会・自然の調和は崩されてきました。私たちは、今一度、人間生活の基本にかえり、自分たちの暮らしや生き方を見直していくことが大切でしょう。

創造

先人に学び、明日に夢をえがき、勇気をもって未来を拓いていこう

理想や夢を抱き、その実現に向けて努力することは、人間だけに備った特性であり、人や社会のありようを決定する基礎となります。21世紀がどのような社会となるか、また、各自の生き方がどのようなものになるかは、私たち一人ひとりが何を理想とし、どう行動していくにかかっています。私たち大人が、“こころの豊かさ”を大切にしながら、自信と誇りをもって生活していくとき、子どもたちも温かい思いやりの心や明日をたくましく切り拓く力を身につけて、勇気をもって希望に満ちた未来へ大きく羽ばたいていけるようになることでしょう。

兵庫県青少年団体連絡協議会

<https://seidanren.net/>



青团連



兵庫県青少年団体連絡協議会 2023年度 加盟団体22団体（順不同）

兵庫県連合青年団	兵庫県商工会青年部連合会
一般社団法人 兵庫県子ども会連合会	公益財団法人 神戸 YMCA
日本ボーイスカウト兵庫連盟	公益財団法人 神戸 YWCA
一般社団法人 ガールスカウト兵庫県連盟	兵庫県青年洋上大学同窓会
一般財団法人OAA(野外活動協会)	一般財団法人 兵庫県少林寺拳法連盟
兵庫県BBS連盟	兵庫県緑の少年団連盟
兵庫県ユースホステル協会	兵庫県モラロジー青少年団体連絡協議会
一般社団法人神戸青年会議所	兵庫県世界青年友の会
公益社団法人日本青年会議所近畿地区 兵庫ブロック協議会	一般社団法人 神戸国際支縁機構
兵庫県スポーツ少年団	NPO 法人 生涯学習サポート兵庫
兵庫県青年国際交流機構 (IYEO)	一般社団法人 いえしま自然体験協会

兵庫県青少年団体連絡協議会 調査研究委員会

委員長	山崎 清治（生涯学習サポート兵庫 理事長）
委員	速水順一郎（兵庫県青少年団体連絡協議会 顧問）
委員	萩本 義郎（いえしま自然体験協会 副会長）
委員	太田 はるよ（兵庫県子ども会連合会 筆頭副理事長）
編集委員	靱 康隆（神戸大学 KooBee）
編集委員	藪内 友乃（神戸大学 KooBee）
編集委員	沼田 香織（生涯学習サポート兵庫）
編集委員	高田 愛（生涯学習サポート兵庫）